

教会の七つの柱① —— 祈り

彼らは皆、女たちやイエスの母マリヤ、またイエスの兄弟たちと心を合わせて、ひたすら祈りをしていた。(使徒 1:14)

今日からしばらくの間、「教会の七つの柱」というテーマで、初代の信者たちが教会を形成していく上で大切にしていたものを一つひとつ学んでいきたいと思います。現代における教会は、教派によって形態は異なれど、既に神学的な意味における「教会論」や組織的な枠組みができ上がっており、信者は「形ある共同体に属していく」というのが一般的です。よって、「そもそも教会が何から始まったのか」という点に目を向ける機会を持たないまま「教会とはこういうもの」という暗黙のイメージに巻かれているかもしれません。そこで、改めて「体系化・組織化される前の教会」の姿を探ることで、私たちの信者としてのあり方を見直す機会になるのではないのでしょうか。

今日はその第一回目——「祈り」です。

彼らは皆、女たちやイエスの母マリヤ、またイエスの兄弟たちと心を合わせて、ひたすら祈りをしていた。(使徒 1:14)

教会の始まりはどこからだったか。弟子たちは復活の主に出会い、天に昇られたイエスを見送りました。その直後、彼らが取り組んだことは、組織を作ることでも計画を立てることでもなく、ただ**祈ること**だったのです。教会がプログラムからではなく、祈りから始まったというのは特筆すべきではないでしょうか。

聖書は、「彼らは心を合わせて祈っていた」と記しています。この「心を合わせて」ということばは、ギリシャ語で「ὁμοθυμαδόν／ホモトマドン」と言って、“心と魂をひとつにする”という意味があります。性格も立場も違う人たちが、祈りの中でひとつにされた。祈りにおいて調和し、内的情熱が共鳴したのです。それが、初代教会の最初の姿でした。教会に一致が必要なとき、主はまず祈りを通して人々を結ばれます。

そしてもう一つのことば——「**ひたすら祈りをしていた**」。これは「やめずに継続した」という意味です。祈りは特別なイベントではなく、教会の日常そのものだったのです。苦しいときだけではなく、喜びのときにも祈る。祈りは一人でもできることですが、複数人が集まって祈るところには確かな力が及びます。

また、よく言うておくが、どんな願い事であれ、あなたがたのうち二人が地上で心を合わせるなら、天におられる私の父はそれをかなえてくださる。(マタイ 18:19)

彼らの祈りは、一人の信仰ではなく、互いの心を合わせる祈りでした。神の御業を心を合わせて待つその時間が、教会の力を養ったのです。

私たちの教会も同じ問いを受け取っています。「私たちは、祈りから始まる群れだろうか?」「活動や奉仕よりも前に、まず祈りがあるだろうか?」「個人の信仰生活の中でも、祈りが置き去りにされていないだろうか?」祈りは、すべての出発点です。今ある教会の課題も、家族の悩みも、この国の未来も、祈りから始めるなら主は必ず新しい道を開いてくださいます。

教会の最初の姿は——「祈る群れ」でした。私たちもまた、その原点に立ち返りたい。活動も、計画も、まず祈りから。そこに聖霊が注がれ、初代教会のような新しい歩みが始まるでしょう。

分かち合いの問い：

- ① 最近、特に祈りに導かれた体験はありますか？
- ② 今、教会として特に祈りたい課題は何でしょうか？